

大連の近代都市空間形成とその文化生産

劉 建 輝

- 1 大連近代都市空間の生成—継承される帝国の「記憶」
- 2 大連の文化生産—安西冬衛の詩作を例として

1 大連近代都市空間の生成—継承される帝国の「記憶」

明治三十七年二月、朝鮮半島や「満洲」の権益をめぐる日本とロシアの長い外交交渉が決裂し、いわば起こるべくして起こった日露戦争がついに幕を開けた。そして、日本は開戦してから約四ヶ月後の五月三〇日に、すでにロシア軍やロシア人市民が旅順に撤退した後の大連をほぼ無血で制圧し、その後の五〇年にわたる「満洲」進出の橋頭堡を獲得したのである。

大連を占領するやいなや、日本軍がさっそく軍政署を設置し、一時完全に軍政を敷いたが、その後、新設の遼東守備軍司令部の下でまず明治三八年の紀元節にあわせて在来のロシア名であるダリーニーを大連に改名し、また同年の六月二三日に正式に民政機関である関東州民政署を成立させた。そして九月七日に日露講和条約（ポーツマス条約）が結ばれたのを受けて、日本はいわば始めて「合法的」に関東州の権益を継承し、その経営にも本格的に乗り出したのである。

中でも、まだ軍政時代の明治三八年四月に、当時の軍政署がすでに「大連専管区設定規則」を公布し、ロシア治下の「すみわけ」政策を踏襲する形で市内を軍用地区、日本人居住地区、清国人居住地区に分ける一方、「大連市街家屋建築取締仮規則」の頒布などによって、都市計画の実施を始めたが、明治三八年九月からの一般邦人自由渡航開始に伴う日本人人口の急増を受けて、まず段階的に軍用地区を民間に提供し、そしてその一年後の明治三九年九月一日に関東都督府官制の成立による大連民政署という完全な民政機関の開庁が実現されると、大連はまさに内地を含む日本の民政治下で唯一の自由港、また国際都市としてその姿を変え始めたのである。

新たな統治形態の下で再出発した大連は、その都市計画の核となる市街建設と港湾建設について、それぞれ関東都督府と設立したばかりの南満洲鉄道株式会社が担当した。具体的には、まず明治四〇年一月に旧ロシア治下の市街計画を基礎として中央公園以東の大連市区計画を決定し、またその翌年の八月に満鉄沙河口工場東方鉄道線路以

南の三七万七千五百坪を工場地区に指定した。その後、さらに同年の九月に伏見台の約一〇万四千坪、明治四四年五月に小崗子と李家屯の三三万坪、大正二年五月に沙河口一帯を順次に市区計画に編入し、開拓と整備を重ねたのである。

そして、大正四年九月に関東都督府による「大連及旅順市規則」の制定に基づき、同一〇月から両市において特別市制を実施し、またその後の大正一三年五月の関東州市制の発布により、いわゆる地方自治制度の下で本格的な市制を開始することになるが、この間、まず大正八年六月に、市区計画並地区区分と街路等級を定め、また工場や住宅、商業地区として小崗子、伏見台以西の沙河口、馬欄河に至る地域において、新たに約二百五万坪の市街大拡張計画を立てる一方、これにあわせた形で全計画地域に住宅、混合、工場、商業用地の四種の区分も決定した。なお、その後も大正一三年に沙河口会の一部、西山屯会、昭和三年に西山会の一部、老虎灘会、寺兒溝屯などの隣接地を次々と市区計画に編入し、後のいわゆる「大大連」の基礎を早くも作り出したのである。

このような周辺への拡張が進められる一方、在来の市街地については、基本的にロシア統治時代の設計を襲用し、そのさらなる完成を目指した。ただ、新征服者の威光を表すために、町名などは徹底的にそれに相応しいものに変更された。たとえば中心部と大通には出征した陸海將軍や軍衙から命名し、その他の街路には日本国内の国名に因んで名前を付けた。監部通、大山通、西通、山縣通、寺内通、兎玉通、乃木通、東郷通、美濃町、飛騨町、伊勢町、信濃町、播磨町、浪速町、長門町、敷島町などがそれである。その後、市街拡張が進むにつれ、新開地にはそれぞれその地の性格に合わせた町名を付けるようになるが、それも内地の「権力」と植民地特有のモダン性を示すものにほかならなかった。たとえば、文化住宅街の南山麓の町名は柳町、桜町、桂町、朝日町と付けられ、海岸沿いのリゾート地や住宅街の町名は向陽台、文化台、光風台、長春台、晴明台、鳴鶴台、秀月台、桜花台、青雲台、桃源台、臥龍台、平和台などと命名された。一方、ロシア時代の中国街である北崗子、西崗子を小崗子と改名し、その町名には中国市街に倣って宏濟街、永安街、福德街、平順街などと中国街名をあてたが、その西の工場新開地には真金武町、白金町、黄金町、京町、仲町、巴町、元町、西町とまた日本の町名を付けたのである。

ロシア帝国の「遺産」を受け継ぎ、その「威光」のさらなる発揚を目指す意気込みがかつてロシア治下においてすでに整備に力を入れていた公園や広場などの大規模な改造と改修にも現れた。たとえば、大正一五年に関東庁から移管を受けた旧西公園については、大連市は昭和三年から十ヶ年継続事業で工費三〇万円を投じて改良に着手し、その後いったんは廃止するが、昭和八年から再度二一萬円の予算を組んで七ヶ年継続事業として取り組み、園内に花壇や水泳場、相撲場、児童遊園などを次々と新設した。またロシア時代から大連の中心だった大広場の場合は、大正三年まさにその中央に初代関東都督大島義昌大將の銅像を建立し、またそれと前後してその周辺には大連民政署、市役所、ヤマトホテル、朝鮮銀行、通信局、正金銀行などの「権力」を代表する施設を立て続けに完成させ、いわ

ゆる帝國的空間をまざまざと見せ付けたのである。

一方、内地と「対抗」する形で、後に「モダン大連」と呼ばれるゆえんのさまざまな都市の「装置」もこの時期から次々と完成している。たとえば、明治四二年に、満鉄がまず電気遊園を旧中国市街の伏見台に建設し、またその直後に星ヶ浦遊園をおよそ一〇万坪の土地に数十万円の大金を投じて大々的に造営したのである。

このように、いわゆる日本治下の大連は、周辺への拡張や在来市街の改造、公園や広場の再整備、さらに町名の変更など、実に多くの都市計画事業を施し、その姿を変えてきたが、しかし、すでに見てきたように、その骨格は基本的にやはり帝国ロシアの「遺産」を踏襲し、その「拡大再生産」を行ったに過ぎない。そこには「帝国」という権力形態は、まさに一種のモダニズムの「記憶」として都市空間の中に現れ、両統治者間のこの支配の継承関係がけっして単なる外交条約などではなく、むしろ都市の「身体」の中に深く刻まれていたと言えよう。

2 大連の文化生産—安西冬衛の詩作を例として

ところで、長く続いた清王朝の封禁政策により、周囲に比べて著しく開発が遅れていた満洲の大地に忽然現れた近代都市大連、その存在が「内地」日本にとって、一体どういう意味を持っていたのだろうか。さまざまな内実が想定されるが、あえて一言で言うなら、それは膨張する帝国日本のフロンティアとしての先端性にほかならない。この先端性には単に既述の先進的な都市インフラの整備のみならず、学校教育や娯楽施設、居住環境なども含まれ、いわゆる文化の生産と消費の面においても「内地」の平均レベルをはるかに超えていた。そしてこの傾向は日本各地からの移民の増加（昭和五年現在大連及び満鉄付属地の日本人人口は二一万五千人余）によりさらに加速され、一九三〇年前後の大連はまさに「外地」における日本最大の「文化都市」となったのである。

大連の文化生産を語る時、誰もがすぐ思い付くのは、日本モダニズム詩運動の先駆的な存在である安西冬衛や北川冬彦らの詩人たちの活動であろう。しかし実際はけっして文学に止まらず、きわめて国際性の高い開港都市であったため、その展開において音楽やスポーツ、またラジオ放送などの分野もかなり発達し、一部には「内地」さえ凌駕していたのである。ただ、それらはまた別の機会に論ずることとし、ここではやはり周知のモダニズム詩の発生、とりわけ安西冬衛の詩作について、その大連の空間性との関係をすこし整理してみたい。

もし、まったく異なる関係のないイメージ、またそれを表す言葉の対峙と撞着をモダニズム詩の最大の特徴とすることができるならば、実はモダン都市大連とその背後に広がる悠久な大地・満洲の両者自身の配列がすでに立派な「モダニズム詩」であると言えなくもない。つまり、忽然出現した近代都市大連がつねに面しているのはほかならぬ数千年の歴

史を有する広大なユーラシア大陸であり、両者はまぎれもなく「文明的」に対峙する異質者同士そのものである。そしておおむねこの両者の「対峙」関係が詩誌『亜』(大正一三年)を立ち上げた詩人たちによって内面化、または身体化された時点で、真のモダニズム詩が誕生したのではないかと想像される。いわば、彼らはまさに大連という特殊な「立ち位置」に同化することにより、「内地」詩人の誰もが到達しなかった想像=創造力を手にすることができ、その「対峙」と「撞着」を自由自在に自らの詩作に活かすことができたのである。

崖の家は街道を隔てて禿山に面して居り、壮大な形容を試みるなら、欧羅巴から始まった大陸の起伏が、かのポート・クローデルの頌の讃える「大地の中の大地」と呼ばれている亜細亜大陸に移行し、断絶して黄海に没入する最後のドタン場—その懸崖を背負っている地勢に踏み止まっているとでも申していい姿勢の中に立っていた。

実際に私の裏山は、桜花台亜社のうしろからせり上って一旦圭岩の露頭した禿山となり、急に雪崩れてそれは大連の港口を扼する断崖になって亜細亜大陸ここに終わっているのだから大変なところといっている。実際又私は日夜この大陸の波動のフィニッシュに踏み耐えているという姿勢の中に昂然として精神を把持して自らを待っていたものである。
(安西冬衛「軍艦マリの界限」)¹

大連にある自宅の所在地を紹介する安西の回想文であるが、大連、そして自分の大陸における「立ち位置」をきわめて意識して書いたものだと読んで間違いなだろう。

現に、安西はまさにこの桜花台という新しい文化住宅街に住みながら、大連市内の電気遊園やデパート、また郊外の遊楽地へ繰り出しては、胸中に北は間宮海峡、南は厦門、西は庫倫(ウランバートル)と縦横無尽に大陸をイメージし、一連の「内地」詩壇を震撼させるモダニズム詩を紡ぎ出したのである。

空間だけではない。昭和八年五月一六日の日記に「(中国長城沿革攷)(東蒙古遼代旧城探考記)を散読。」²とあるように、安西は大陸で展開された中国や蒙古の歴史にも高い関心を示し、つねに縦軸の時間上のイメージや言葉の「対峙」や「撞着」にも心掛けていた。

ここで、安西のこの時期の詩作を例に、本人がいかに租借地大連という帝国のフロンティア、またユーラシア大陸の空間と時間を内面化ないしは身体化し、自らの表象世界を作り上げたかについて具体的に見てみよう。

まずは租借地大連をめぐる一連の短詩と散文詩である。

1 『安西冬衛全集』別巻(宝文館出版 一九八六年八月)

2 『安西冬衛全集』第七巻(宝文館出版 一九七九年一二月)

①曇天と停車場 ブルドック持てる夫人を配せる

陸上税関

支那官吏

一等急行券

陸橋 歩廊 展望車。

婦人の携帯品

手風琴大のブルドック。モオランの「アアク燈」。それから朝鮮水原の黒き絹扇。

展望台 婦人とブル

やつとおろしてもらふ。早速絨緞の上を駆廻る。それから仔細らしく図書館の前に
いつて嗅がす——嚏。

嚏。嚏と一緒に粗相をする。極少量。絨緞をよごす。

叱られる。

尤も叱つてゐる間に、もう当人はケロケロとしてチェックのデッキ・パネルに出て
ゐる。

—しようのないひと。

歩廊を前部に急げる母子

—母様、カメが。

—ええカメ、さ側見しないで。

十分の後、急行列車は曇日の中に折畳まれていつた。

（「軍艦茉莉」昭和四年四月）³

②櫛比する街景と文明

魁に文明を将来した写真館が、風景の中で古ぼけてゐる。

（この鉛色の街に、もう「市区改正」が到来してゐる）（「軍艦茉莉」）

③陸橋風景

蒸暑い蝙蝠傘を纏つた老婦人 その風変りな裳裾から広がつた歪な街

人力車

あすこは煤煙をたやしたことがない。（「軍艦茉莉」）

①は列車出発直前の大連駅風景を描くものだが、ここには租借地大連の性格を表す事象が見事に記号化されている。陸上税関、支那官吏、一等急行券、有産階級婦人、ブルドック、フランス人作家モオランの小説、朝鮮産の絹扇、駅付属の図書室、まさに一見まったく無関係のこれらの事象の「撞着」が駅前の雑踏を躍動感を持って紡ぎ出し、そして近代文明の象徴である急行列車も曇日の中、ここから「折畳まれて」いったのである。

3 『安西冬衛全集』第一卷（宝文館出版 一九七七年一二月）

②はわずか一行だが、かつて文明の最先端だった写真館がいつの間にか往時の栄光を失い、今や「街景」として後退しつつある様子を端的に捉えている。文明装置の目まぐるしい交替、これもフロンティア都市大連のリアルな姿にほかならなかったのである。

③は大連駅陸橋のごく日常的な風景となっているが、ただ詩人はまるで画家のようにこれに徹底した印象派的なタッチを加えている。つまり、陸橋を渡る老婦人の蝙蝠傘が普通に差されるのではなく、体に纏われているように表現され、そして歪な街もその風変わりなスカートの裾から広がっていった形で詩人の感覚的な加工が施されている。大連の都市空間を完全に内面化していなければ、けっしてこうした抽象的なデフォルメができなかったのだろう。

次にユーラシア大陸の空間をめぐる詩人の豊穡な想像力を覗いてみよう。

④新疆の太陽

新疆の太陽が、私を奪った。

既に罪悪的な省城は、大流沙の彼方、地平線に出現を始めた。再現の世界に於て、辛じてオペラのみがもつ、これは無上の接待である。

曾て私が投げかける狭い世界、一つの記憶がみるみる後退する。

迅速する大流沙を絶る困憊の中、

霾る曙の中に。

(「軍艦茉莉」)

⑤黄河の仕事

回回教は混凝土を発明した。

Lo-Lo 族は巴里警視総監よりも優美である。

甘肅省 といふ文字は、建築群の構築を暗示する。私は埋蔵された都市の発掘を、支那政府に建言する。

墩煌の燈火集中を見よ。地球開発会社に投資せよ。

Yangtsekiang Bagdad Express は、拉里、デリーの間の tube を要とする。主として蔵地に於ける蘚苔類が作用する、軌道の峻烈なる腐蝕を避けるために。

黄河は地球を削つてゐる。

Catalyser を与へよ。

ミシシッピーと河底を共産させるために。

(「軍艦茉莉」)

①～③とやや異なり、④と⑤は明らかに詩人が自らの所在する地理的な位置、つまりユーラシア大陸の終端と帝国日本の前線が交差する空間点を利用してその詩的イメージを膨らませている。④の中の新疆、大流沙、またその背後の省城は、あるいはまさに大陸の西からやってきた文明の象徴で、それが栄光と罪悪を伴って襲来し、かつて詩人の寄り掛かっていた世界を困憊と混沌の中に後退させている。これに対し、⑤に現れた黄河、甘

肅、敦煌、蔵地などはあるいは中国ないしは東洋の伝統の代表として理解することができ、詩人が埋蔵された都市の発掘、敦煌の灯火への注目を呼び掛けたのはいわばそういう東洋伝統の潜在力を高く評価しており、そして同時にそれと通底するもう一つの古文明発祥地のミシシッピーとの「共産」も期待していたのであろう。

最後にユーラシア大陸に流れる悠久な時間に関する詩人の観察である。

⑥興亡

落の下に青い韃靼が亡んでいつた。猫の尾の渦巻の中から埃つばい回回教が生れてきた。
(「軍艦茉莉」)

⑦二つの河の間

私どもの亜細亜では、最初の床を、二つの河の間にとるのです。

印度では、VYomagangaの下、Gangesの上で。支那では、KiangとHoとにさしはさまれて。蒙古では、流れる沙の面紗と沙の面紗を被いだ流に匿されて。朝鮮では、閩房にある河——Jordanの水を沃ぎあふて。……

(「亜細亜の鹹湖」昭和八年一月)⁴

⑥もただ一行の短詩であるが、中国の西北高原に繰り広げられた千年以上の歴史の興亡を見事に捉えている。北方民族韃靼の消滅やイスラム教の東方進出がこできわめて具象的かつユニークに描出されており、そしてその生き生きとした言葉の表現はまたこの間の壮大な歴史の変遷をめぐる詩人の深い観察が凝縮されている。

⑦はアジア各国の文明の発祥を述べるもので、印度の文明はVYomagangaの下とGangesの上で生まれ、中国文明はKiang(揚子江)とHo(黄河)の間に誕生し、蒙古は流れる沙の面紗と沙の面紗を被いだ流に源を持ち、朝鮮の起源は閩房の河——Jordanの水にあるという。詩人はここで一種の独特の視点と言葉で時空間とも大変広大にアジア文明の誕生を概括している。その想像と表現はまさに至妙の域に達していると言わざるを得ない。

繰り返すことになるが、以上の例でも分かるように、安西とその仲間たちはいわゆる内地の当時の詩人たちを上回る詩的なイマジネーションを獲得できたのは、大いに彼らが滞在した大連という帝国のフロンティアとしての特殊な地理的位置に負っている。まさに彼らが新旧文明「対峙」の地であるこの植民地都市を徹底的に内面化、身体化したからこそこれまで内地では生まれなかった新しいモダニズム詩を創出することができたのである。

そして、安西や北川ほどインパクトはなかったが、『亜』の終刊後、その精神を受け継いだ大連在住の詩人も少なからずいた。同人誌『戎克』(昭和四年)や『燕人街』(昭和

4 『安西冬衛全集』第一巻(宝文館出版 一九七七年一二月)

五年）などを舞台に島崎恭爾、加藤郁哉、稲葉享二、古川賢一郎らが活躍し、『塞外詩集』（本家勇編 塞外詩社 昭和五年）のような秀作集を世に送り出している。

このように、大連は、当初、あくまで「植民地」として経営され始めたが、その後帝国間の競争という力学の中で急速にフロンティアとしての先端性を増し、そしてそれが文化の領域にも反映され、一部ではあったが、「内地」を凌駕し、牽引する立場にまで駆け上った。「帝国」発のモダニズムがまさにここで反転されたのである。